

現役時代のノウハウを活かして 定年後も働くことができれば 老後の不安はすべて解消します

年金不安等を背景に、老後に暗いイメージを持つ人が増えている。この問題の解決策の一つとして挙げられるのが定年後も働くこと。そこで今回は、定年を機に入社以来勤めてきた野村證券を退職し、現在は経済コラムニストとして活躍中である大江英樹さんに、ご自身の体験と合わせて老後不安を解消する術について伺った。

55歳になっても定年後の 明確なイメージは持てない

——大江さんは定年を機に起業され、精力的に活動されていますが、やはり、現役時代から起業を見据えていたのですか。

大江 今でこそ経済コラムニストとして活動していますが、55歳くらいまでは「60歳での完全リタイア」を考えていました。大学卒業後、野村證券に入社した私は、個人向け営業に23年、従業員持ち株会や財形貯蓄等の提案に5年、確定拠出年金の加入者教育等の業務に10年従事してきました。証券会社の仕事はハードなものも多かったのですが、60歳以降はのんびり過ごしたいと考えていたのです。

それに「定年はまだまだ先のこと」と、他人事のように捉えていました。55歳といえども、40歳代と同じように定年後の生活について漠然としたイメージしか持てなかったわけです。

それが年を重ね、定年が近づくにつれて「仕事もせずに、のんびりしていたら認知症になってしまうのではないか」などと老後を不安に感じ始めたのです。そんな折りに、高齢者雇用安定法が改正されました。当時の上司から「再雇用で残ってほしい」と言っていたいたこともあり「65歳まで会社員として働こう」と決めました。これが58歳のときの話です。

——そこから、どんな心境の変化があつて、起業を考えるようになったのでしょうか。

大江 いよいよ定年まで半年というときのことです。私は確定拠出年金部長の役職を解かれました。このタイミングで再雇用の働き方について考えるようになりました。

会社員にとっては、昇進によって自分の責任と権限が広がっていくことが、働くことへの大きなモチベーションとなりますよね。嘱託社員になっても自分

株式会社オフィス・リベルタス代表取締役

大江英樹

